



姉妹校提携誓約書

1971年4月開校以来の10年間は、学校内外に対する運営では、西欧・北米全日校の嚆矢（こうし）ゆえに前例がないため暗中模索、試行錯誤を経ながら徐々に本校独自のスタイルを作り上げて行く時期であった。その中で国際親善への取り組みは海外校の当然の課題として開校当初から当り前のように行われていた。

その一つの結果が本校から徒歩数分の地にある市立ツェツィーリエンギムナージウムとの姉妹校提携であった。これは木庭（こば）清八第4代校長（1979.4.～1982.3.）がイニシャティブを取り、Ceci校に通う日本人生徒の保護者の仲介援助を得ながら、アンナ＝クリスタ・マイヤー＝ユストス校長と協力して両校の将来を考えて作り上げたもので、**1981年11月26日**にツェツィ校の講堂に出席した両校上級生の生徒達を前にして姉妹校提携誓約が行われた。誓約式後の第2部では両校生徒出演による祝典音楽会が行われた。提携の目的と意義はここに写真で載せた「誓約書」にある通り。この式典で述べられた両校長と伊藤安太郎第6代理事長（三菱商事）の御挨拶は夫々味わい深く、また興味深いものであったが紙数の関係から掲載できないのが残念である。

ツェツィ校との係わりは実は本校開校の年から始まっていた。1971年4月に小5以上の授業が始まったのは教会付属の青少年用建物（カニージュウスハウス）で理科室などない。そこで歩いて15分程度の地にあるツェツィ校（当時は古典語系女子ギムナージウムであった）の生物室、化学室、物理室、夫々の準備室を市の学務局を通して週3日、1971年11月から73年3月までの1年4か月使わせていただいた。尚同校はたまたま1973年の夏休み後の新学期から、（第1学年である）5年生に男子生徒を受け入れてこの時から共学開始、また新外国語系ギムナージウムになった。また1974年からモンテッソーリクラスが導入され、当時本校教職員は折に触れて見学に行った。

また1974年3月に第3回生として本校中3を卒業し、74年4月から75年2月までの10か月間、ツェツィ校に通った三宅真奈美さん（本校第2回派遣教員三宅正勝先生の長女）が上梓（じょ

うし)した『ドイツの教室ひとりぼっち』(かんき書房)は反響が大変大きく、当時日本では幾つかの放送局や新聞、英字新聞でも報道されてこのギムナジウムの紹介や、目立たなかった海外で生活する生徒たちに関心をもたれ始めるのに一役買った。

その他姉妹校提携前の大きな共同作業としては1979年11月30日に本校音楽室で行われた、本校、ツェツィ校、市内カイザースヴェアトにある(当時の)アメリカンスクールの中学生達による**3校合同の日本史の授業**がある。これの実施のために何か月も前から3校の先生方が**先ず**お互いの学校の制度や学校生活の違いを認識し理解することから始まり(例えば職員室という言葉一つとっても三校の先生方のイメージが夫々違う)、時間をかけてテキストを作り、翻訳、OHP写真作成の準備などの苦勞を重ねて大きな成功を収めたことが記憶に残る。

両校の交流は実は姉妹校提携の前も後も組織的でも計画的でも系統的でもなく、年に2~3回教員がスポーツ親善試合などをやる程度であった。ただ、この間ツェツィ校の方では、1985年から1988年まで当地で総領事を勤めていらした黒川剛(つよし)大使(後年オーストリア大使)の御尽力もあって同校内に日本語課外クラスが設けられ、リーベルト小泉清子先生の指導の下で日本や日本語、日本人生徒への関心が高められる下地が作られた。1990年代になって両校の教員だけでなく生徒同士の交流も少しずつ増えてきたが、(1995年10月末の本校創立25周年記念式典と記念演奏会はツェツィ校の大講堂を借用した)上記のように組織的、計画的、系統・継続的な交流に向かって積極的に動き始めたのは1996年5月に派遣された森山隆介第2代国際交流ディレクターの時からであった。

爾来ベアトリス・ベルクマン教務部長を窓口として本校の国際交流担当者との定期的な話し合いが持たれるようになり、その後は主に中学生段階の交流授業などが行われており、姉妹校提携誓約後20年にしてようやく本来の目的や意義に適った交流になるよう努められている。



木庭清八第4代校長とアンナ=クリスタ・マイヤー=ユストゥス校長

